
ハウリング

ミツルギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハウリング

【Nコード】

N1137W

【作者名】

ミツルギ

【あらすじ】

北欧市。それは関東地方より少し離れた孤島のことを指す。実質神奈川県内におさまっているが、その扱いは他県の様なものだ。

そんな北欧市で起きた事象。そしてこれから起きる事象。

主人公、五十嵐龍貴はその数々の事象に立ち向かっていく。自分を犠牲にすることを、常に頭に置きながら。

第一話 五十嵐龍貴（前書き）

五十嵐龍貴

年齢：17

身長：167cm

体重：64kg

黒髪と赤目が特徴的な男子高校生。見た目は地味だと思われがちだが裏ではとんでもない事をしている。悪友の熊本秀平。イマイチ馬が合わない藤本加奈。毎回保健室の利用を報告する森下雪乃など、個性豊かな面々に囲まれながら、日々北欧市で起こる事象に立ち向かう。自分を犠牲にすることを、常に頭に置きながら。

第一話 五十嵐龍貴

北欧市立北欧高等学校。その保健室。

保健室とは、授業を無断欠席する学生の避難所であり、美人養護教諭に憧れを抱き男子生徒が悶々妄想を膨らませる場所であり、怪我をしたときに治療をして貰う簡易病室である。もちろん、前者二つのような例も少なくないが、本来の用途は三つ目である。しかし、三つ目の用途は実際少ない。怪我を負う生徒が発生するのは稀だし、清掃の時間にトイレトペーパーの交換や、水道の石鹼の交換などが主である。

今、その保健室には男女が一人ずつ、怪我の治療を行うための座席に座っている。部屋の中央に位置する二つの椅子。そのすぐ近くテーブルには救急セットが置かれている。見渡せば本棚、気分が優れない利用者のための簡易ベッド、手洗いやばい菌を落とすための水道などが設置されている。

他の教室には無い独特な雰囲気と匂いに包まれながら、北欧高等学校二学年男子、五十嵐龍貴は全身をくまなく治療されている（それも保健室などという簡易病棟で済むはずのない大怪我）。

「はい、おしまい」

バシン！と、小気味良い音が保健室に響き渡る。その音源である二人目の人影、同じく二学年女子、藤本加奈は、不機嫌そうな顔で怪我人の男子を見る。

「痛つつ・・・！？てんめ、どこの世界に怪我人の具合確かめるために打撃を与える女子高生が居るんだよ!？」

「ここ、目の前だよ」

「ぶっ殺す!!」

物騒な単語を叫んだその瞬間、ガララ、とレール式の扉を開ける者が現れる。

そこには典型的な美女養護教諭、もりした森下 ゆきの雪乃が立っていた。

「はいはい、喧嘩は保健室の外でね?」

パンパン、と両手を叩きながらそういうと、龍貴は席を立ち、学生かばんを持って保健室を出ようとした。

落ち着いた黒い短髪、しかし対照的に、その瞳は凶暴な赤で染め上げられている。ちなみに生まれつき。

そんな赤目で藤本を睨み付け、龍貴は今度こそ保健室を出て行った。

「……ふふ、大分気に入られてるみたいね?」

短い黒のスカートから生足を艶かしく露出させ、モデルのような出で立ちで自分の席まで歩いていく。自慢の黒髪（肩まで伸びている）を鬱陶しそうに後ろへまわしながら、雪乃は席に着く。

その視線の先には、腰の辺りまであるエメラルドの髪、翡翠の瞳を備えたスタイル抜群の巨乳女子高生が座っていた。

「……どうして……あの人は自分を大切に出来ないんだろう……」

そう呟きながら、藤本は放課後まで残って部活に勤しんでいる運動部へ目をやった。

「よう色男。治療は完璧だな？」

「焼くぞ」

「勘弁！菓子パンとジュース買って帰ろうぜ」

軽口を叩きあいながら龍貴と肩を並べるのは、熊本 秀平。茶髪を所々はねさせ、常に背負って歩いている竹刀入れがトレードマークである。

校門前から夕焼けに染まった道を歩き、途中にある常連のコンビニへ足を踏み入れる。

コンビニの店員が、二人に気さくに話しかけた。

そのコンビニの制服なのだろう、緑色のバンダナを頭につけ、赤と白を貴重としたユニフォームを纏っている。

「いらっしやい！いつものならその棚に並んでるよ」

そう言われて確かめてみると、狙っていた菓子パンが専用のコーナーに確かに存在していた。

コンビニに特有の巨大なクーラーボックスの透明な扉を開け、目当てのジュースを取り出す。そして先ほど言われた菓子パンをレジに

持っていった、商品と一緒に小銭を出す。もちろんお釣りは無し。

「毎度毎度ありがとね。二人が居なくなるとウチの売り上げもひっくり返しそうだよ」

レジに小銭をしまい、レシートをゴミ箱に放りながら店員は言う。

「こんな菓子パンと飲み物だけでか？」

「そう言うなよ。実際俺らも助かってんだし」

その後、少し世間話をして、二人はコンビニを後にした。しばらく歩くと、普段はあまり自分から喋らない龍貴が口を開く。

「で、今度はどこに隠れてるって？」

その目は獲物を探す獣のような雰囲気を漂わせていた。隣の友人は、逆に目を閉じながら後ろへ親指を向ける。

「その電柱。校門出たところから」つけられてた」

ギロリ

そんな擬音が聞こえてくるような視線で後方を見ると、電柱から人影が走っていく。それを少しだけ視認すると獣と化した少年はそこから”消える”。

ドバツ！と、何かと何かが発音するような音がしたと思うと、獣は人影の前に立っていた。

「ヒイイツ!!!??」

何が起きた。そう思ったときには首を締め付けられるのを人影は感じた。その力は決して緩められず、むしろどんどん強くなっていく。人影から力が抜けていく。秀平は、見るに耐えない、といった表情で龍貴と人影に近づき、竹刀入れを右手に持った。

「率直に聞け。何でつけてた？」

質問が投げかけられると、力が弱まるのを感じて人影は答える。せめてもの抵抗なのか、龍貴の手に自分の両手を添え、引き剥がすようにしながら。

「あ……ある人の……命令で……」

「ある人ってのは？」

「い、言えなグツ!？」

途中、再び力が蘇った。

龍貴は首を締め付ける力を弱めることなく、人影の体を持ち上げ始める。その姿はまるで処刑執行人の様だ。

「まつ、ま^まつで……はな、はな^まずがら……」

「龍貴」

もはや言葉も枯れ始めている。これ以上やればすぐに哀れな末路をたどるだろう。そうなる前に友人を止めようとした秀平。だが、

「龍貴っ!」

「・・・・・・・・・・」

友人の言葉が届いていないのか、そのままの姿勢と力を維持している龍貴。

【この人間は、生きていても】

【こんな人間が、生きていても】

「死ね」

その一言と同時に、人影の全身から力が抜け落ちた。手を放し、地面に落下しても、その体はピクリともしなかった。

翌日、龍貴は自宅のリビングでテレビを見ていた。朝に流れる報道ニュースだ。テーブルに着き、朝食をたいらげながら見ていたニュースには、次のことが流れていた。

「今朝、北欧市戦館町せんかんちょうにて、ある男性の死体が発見されたと警察に通報がありました。遺体の首には手痕があり、首を絞められたことによる窒息死が原因であると考え、警察では、殺人の疑いがあると

見て捜査を進めています』

それが龍貴の日常だった。”そういう”人間が来た時には迷わず殺し、抵抗があれば傷つき、そのたびに”あの”保健室のお世話になっている。そして今回も、テレビにてその事後が映し出されるのだ。

報じられていたニュースにはまだ続きがあった。龍貴は味噌汁をすすりながら視線を画面に向け続ける。

『北欧市での殺人は、今回で実に11件目です。手口はバラバラですが、警察は連続殺人と見ているようです』

退屈そうに視線を外した。

【ああ、また今回も証拠は残らなかったな】と。
そんな物思いにふけていた時、鼓膜に二つの足音が響く。

「お兄ちゃん、おふあよう〜」

「おはよう兄ちゃん z z z . . .」

「おはよう龍希。龍明、もう朝だ。しっかり起きろ」

同じ顔をした、7歳くらいの子供達がテーブルへおぼつかない足取りで向かう。

彼らは双子だ。男の子の方は龍明^{たつあき}。女の子の方は龍貴^{たつき}。二人とも龍貴のかけがえの無い家族だった。

龍明は席に着きながら目をこする。

「兄ちゃん . . . 今日”ハウリング”の実技なの . . .」

「たつきも・・・」

二人して少々言葉足らずに喋る姿はとても愛おしい。思わず顔がほころぶ龍貴。

数秒して頭を横に振りながら、龍貴は言った。

「そっか、頑張れよ。二人とも俺と同じ属性なんだから、扱い方は教えただろ？」

「うん」

ハウリング。

物質、現象、事象、エネルギー。その他この世界に存在するありとあらゆるものと共鳴し、さまざまな現象を引き起こすこと。そしてそれが出来るものを、人は共鳴者ハウリングガルと呼ぶ。

五十嵐家いがらしけの三人兄弟は、その共鳴者なのだ。

この双子はこの近辺の小学校に通っているのだが、その中でも特別クラスに扱われ、現在ハウリングの使い方の授業も受けているという。今日はその実技試験なのだそうだ。

龍貴は右手を小さく拳手しながら、身を乗り出して二人に問いかける。

「んじゃ、朝ごはん食べ終わったら着替えて、少しハウリングの復習をしようか」

「はい」

龍明と龍希は両目を閉じながら（可愛いなあ畜生と龍貴は思った。血の気が多い割に兄馬鹿である）返事をする。

龍貴は一足先に朝食を片付け、双子の復習の準備をする。

双子は兄の言うとおりに片付け、着替え、準備を済ませて裏庭へやってきた。龍貴も先に来ていたようだ。

五十嵐家の長男はライターを懐から取り出す。

「良いか？」

そして火をともし。双子はそれを不思議そうに見つめながら兄の話聞く。すると龍貴がライターの火に、自分の手を暖めるようにかざした。

「この火に手をかざして。そう、あまり近づけるなよ危ないから。んで念じるんだ。火と考えてることを通じ合わせるイメージで・・・」

本来ライターから出現した火が思考を持つなどありえないことなのだが、これがハウリングのコツらしい。

双子は目を閉じ、手をかざす。眉間にしわを寄せながら難しそうな顔をしている。龍貴はそんな双子に癒されながら、かざした手に力をこめた。

そして、

・・・キーン・・・

ポッ！

「・・・おお！さすが我が弟妹達！飲み込みが早いな」

一瞬、オレンジ色の波紋が手の平から現れたかと思うと、次の瞬間には龍貴の手から炎が燃え盛っていた。

双子も自分の右手の平に目をやる。するとやはり、龍貴と同じく

炎がチラチラと燃えていた。龍明はその様子に素直に歓喜を隠さず、「イエーイ！」と叫んだ。直後、龍貴から「近所迷惑だ」と左チヨップをかまされる。龍希は対照的に、ホッと安心を隠し切れずに息をした。

龍貴は目線を双子から外し、上から見下ろすように姿勢を戻す。

「今のコツを忘れんなよ。忘れなきゃ実技はバツチリだ！」

「うん！ありがと兄ちゃん！」

「ありがと！お兄ちゃん！」

素直に礼を言った二人に再び癒されながら、龍貴は双子を玄関まで見送った。

兄の顔はここまでだ。

そう自分に言い聞かせ、龍貴はポケットにしまっていた携帯電話を見る。そこには新着のメールが一件だけ着信していた。

そのメールにはこう書かれていた。

『また侵入者だ。今度は俺が”片付ける”から、お前は引っ込んでおくように』

友人、熊本秀平からだ。彼もまた、共鳴者だ。

そもそもこの北欧市の人口の半分は共鳴者なのだ。ある事件を境に、この北欧市には共鳴者が大勢住んでいる。それぞれ共鳴できる”モノ”^{ファンタジーワールド}は違うし、ある人物は動物にまで変身するという。ようは超人世界なのだ。しかも、その共鳴者の人口は徐々に増えている。いずれ北欧市の全住民が共鳴者になるだろう。

しかし、当然そんな特異な能力を持った人間を野放しにする馬鹿

は居ない。

「・・・偉そうに。この前だってお互い”死にかけた”じゃねえか・・・」

ボソツ、と独り言を漏らす。

龍貴たちは今、そういったハウリングを研究する機関の刺客達を排除する仕事をしている。なぜならその機関に少し協力を持ちかけただけで人体実験も同然のことをしているし、自分達も他の人間達と同じく人権があり、平穏を望んで北欧市に住んでいるからだ（暴力的や好戦的な共鳴者も居るが）。

そんな刺客達もただ殺されるだけではなく、ある程度装備を施して戦いを挑んでくる者も居る。龍貴たちは主にそういった連中を相手に日夜戦っている。昨日のはたまたま近くに居て、自分達で手がかけたが。

「はぁ・・・そろそろ行くか」

自分はこれまで、そしてこれから何人の人々をあの世へ導くのだろつ。

「一瞬そんな”下らない事”を考え、龍貴は自宅を後にするのだった。」

第一話 五十嵐龍貴（後書き）

ギャグをとるところどころ混ぜようとして失敗している・・・orz
しかし兄弟に対する態度と同級生に対する態度が全く違いますね。
表裏の激しい主人公です。

そんなこんなで、”はじめて見る”小説として、よろしく願います。

第一話のオマケ（前書き）

あーまあ、ネタが浮かばず舞台裏的なものです。

何故私が今作品を書いたか、彼らの誕生秘話から私の黒歴史までとことん詰まっています。

第一話のオマケ

龍貴「おい」

秀平「あん？」

龍貴「この設定酷い。何コレ俺丸つきりダークヒーロー厨二設定主人公じゃん」

秀平「いや、実際これからのストーリー展開的にお前には、厨二+王道+リア充役やってもらう感じだから」

龍貴「勘弁して欲しいんだけど。つか第一話から人殺しかよ」

秀平「まあ戦争ひかえてる世界だし？軍隊持ってない北おれたち欧市民が出張るのはもう確定事項」

龍貴「確かにハウリング自体大きな力だしなあ」

藤本「そして私がヒロインという」

龍貴「初っ端からヒーローとヒロイン知り合い設定ですか」

秀平「だから言ったじゃん、王道も混ぜるって」

藤本「ちなみに巨乳描写は作者がそういう趣味だからです」

龍貴・秀平「下ネタ乙」

藤本「まあ脳内で勝手に作っただけでも作品化出来ない貧相な知能だもんね」

龍貴「ハツハハワロス。今まで何回俺たちで書き直して色んなサイトに載せたよ？」

秀平「とにかく作品化可能なサイトに載せたよな」

龍貴「初代モバゲーアカウント時代が一番輝いてたし、あれ以上は正直繁盛しない気がする」

秀平・藤本「同感」

龍貴「確かキンパーパロ？オリ設定で俺たち作ったのがそもそもの始まりだったんだよな」

秀平「お前がキープレード二本持ち設定。俺たちが光と闇の力持ち設定」

藤本「そして私が第八のプリンセス設定だった」

龍貴「そしてエンディング間近でまさかの書き直し」

藤本「あれは調子に乗った選択だったよなー」

秀平「大人しくエンディングまで書けば良かったのにな。そこから派生する選択もあったらるうに」

龍貴「本当はもう一人居たんだが、ネタバレ防止で出せないって言う」

秀平「その上書き直しは失敗。新たにキャラを出してもネタが浮かばず、携帯変更にあわせてアカウント消去」

藤本「確か謎解きミステリーだっけ？えっと、元ネタがクロックタワーで、シザーマンの正体と屋敷の脱出方法を見つけ出すっていう」

秀平「そんな風に書きたかったけど、まあ高校生レベルじゃたかが知れてるもんだ」

藤本「他にもペルソナパロ、別のジャンルのミステリー、自己満足SSまでやってのけたよね」

秀平「いや、厳密には本当に全部自己満足で終わった。携帯にデータもあつたけど今は全部無いし」

龍貴「・・・ああ、あとようやく思い出したけどオリジナルテイルズオブシリーズも作ろうとしてたよね？」

藤本「そうそう！ヒロインは巨乳じゃないけどちゃんと考えてたみたいだね」

秀平「ストーリーやキャラクターの進行予定、パーティ構成や加入タイミングも大体出来てたみたいだね」

龍貴「まあ・・・肝心の舞台である”世界像”が組みなくてダメだったみたいだね」

秀平「あれは本当に惜しかった。真面目に。いや本当ガチで」

藤本「でも懲りないよね。別に小説家になりたいわけじゃないのにまた書き始めて」

龍貴「意地でも自分の脳内二次元を作品に残したいんだろ？もはや執念だな」

藤本「正直この小説のタイトルも微妙だしね」

龍貴「もうこの際素直に”ハウリング”で良いだろ」

秀平「捻れば捻ろうとするほど浮かんでこないしな。悪循環過ぎる」

龍貴「その上この小説が完結したら」とあるシリーズ”とのクロスも考えてるんだろ？マジキチ過ぎてもう哀れみ通り越して愛しさすら覚える」

秀平「まっ、良いんじゃないの？やりたいようにやれば」

藤本「でもこれって一人慰めだよな」

龍貴・秀平「言うな」

龍明「龍貴兄ちゃん。そろそろ朝ごはんだぞ」

龍希「お腹すいたよーお兄ちゃん」

龍貴「そっか、今行くわ。……………んじゃ、今日はコレでお開きな」

秀平「おう。……えー、舞台裏ではこんなノリですが、本編では

かなりギスギスした状態でお送りしたいと思います」

藤本「こんな駄作いつまで保つか分かりませんが、最後までお付き合いいただけたらなあという次第であります」

龍貴「異能力”ハウリング”、舞台は平行ル感溢れる元神奈川県の”北欧市”、俺たちは正直何度書き直されるか、何度挫折されるか分かりません。でも、力のある限りこの作者の脳内二次元を書き続けたいと思います」

龍貴・秀平・藤本「それでは皆さん、また本編で」

第二話 藤本加奈（前書き）

藤本 加奈

身長：162cm

体重：女性に対する礼儀がなっていないよ

本作のヒロイン・・・の予定。エメラルドグリーンのロングヘアに翡翠の瞳。微笑めば誰もが振り返る巨乳美少女。誰にでも優しく接せるが、同時に誰でも受け入れてしまう無防備な箇所もある。北欧高等学校の二学年。そのハウリングちからの性質から、保健委員を務めている。

しかし主人公であるはずの五十嵐龍貴とはあまり馬が合わないらしい。別にツンデレと言うわけでもないのに。

第二話 藤本加奈

現在北歐市には6：4の割合で共鳴者ハウリングガルと一般市民が分かれている。しかし今こうしている間にも、共鳴者の数は増え続けている。いずれ、この孤島の全住民が共鳴者となる日が来る。そうなれば日本政府にとつてどうなるか……。

自分は共鳴者だ。当然この件に関わらなければならない。というより、関わる宿命になるのだ。だからこそ自分の出来ることを、自分のハウリングが生きている限り続ける。それが私、藤本ふしもと 加奈かなの務め。

藤本は北高ほくこうに入り、保健委員になったその瞬間からそう自分に近い、常に言い聞かせてきた。だからこそけが人は全力で治してきた。そのはずが……。

「……うつつす。怪我治せ」

完璧だ。完璧な傍若無人ぶり。今現在、藤本の頭を悩ませる張本人。

その傍若無人男子は血をポタポタと垂らしながら藤本に直面する席に座る。彼はこうして毎日のようにやって来る。藤本の方には目もくれない。彼女を知る男子が見たら愕然とする光景である。

彼の名は五十嵐いがらし 龍貴りゅうき。藤本と同じく共鳴者であり、しかもクラスメイト。彼は請け負っている仕事の仕事だけに血を流すことも少くない。おかげでホームルーム以外の教室でも顔を合わせる始末だ。

「治してもらおう人の態度じゃないけど……。まあ仕方ないか、コレが私の仕事だし」

藤本は目の前の血だらけの少年の心臓に当たる部分に右手の平を置き、目を閉じる。そして一瞬、キーン、という音と共に鮮やかな緑色の波紋が、彼女の手の平から外側へ浮かぶ。

それを見るや否や、みるみる龍貴の傷口が塞がっていく。

「……やつぱ便利だな」

それだけ咳くと、完璧に血の止まった体を見回し、席から立ち上がる。もう傷は無いようだ。

「一時的な止血だから、あまり衝撃を受けるとか、無理に動かしたらまた血が出るからね」

右手首をさすりながら、彼女は龍貴の体を診る。

彼女は”細胞”と共鳴し、力を発揮する共鳴者である。自他問わずその体の細胞と共鳴し、細胞の増殖力を加速させる。そうすることで傷を治せるというわけだ。基本人間の傷は、細胞を育てなおして自己再生するものだ。しかし決して万能というわけではない。例えば腕なんかを切られて分離させられたら、止血は出来るが生やしなおすことは出来ない。まあそんなことが出来たら、目の前の傍若無人男は相当の無茶をして帰ってくるに違いないのだが。

そんな藤本のハウリングは、性質や弱点の有無を含め、”ナイチンゲール 応急処置”と呼ばれている。

「ん……まあ気をつける」

「そんなこと言って、明日もボロボロで来るんでしょ」

「っせえなあ……しょうがねえだろ……あ、床汚れてる。拭いとくわ」

「へ？あ、ありがとう」

掃除用具入れからモップを取り出し、急に床を掃除する龍貴。彼なりの恩返しの仕事なのだろうか。

そんな考えが頭をよぎり、なんだかその光景がおかしくなってきた藤本は、自然と口を緩める。

「にしても……ナイチンゲール 応急処置だっけ？ 妙に符合する名前だよな」

「私だけじゃないよ。五十嵐君だって相応の名前じゃない？」

「勘弁しろよ。気に入って選んだわけでもねえんだし……」

「確かに」

一人はモップで床をこすりながら、一人は治療報告書に必要な事項を書き入れながら対話をする。この二人、特に馬が合うわけではないが、いったん話題と価値観が合致すればそれなりに場は持つ方だ。この北欧市には共鳴者ハウリングガルが6の割合で存在する。そんな数多くのハウリングにはそれぞれ名前がつけられている。何故なら 仕分けの意味もあるが ハウリングは発動する個人によって性質や形が違うからだ。それについてはおいおい説明していくが、そんな個人差で違う力を、いちいち個別で分けていては埒が明かない。故に共鳴者と見受けられた市民は即座に市役所の住民登録票の項目にそのハウリングの名前を書かれるのだ。

この二人にとってそんなことは特に大きな問題ではないが、龍貴の場合、登録される時に気に入らない名前をつけられたらしい。まあこれは「適当に付けとけ」と市役所側に言っただけられたのだから自業自得なのだが。

「ありがとうね」

「ああ？礼ならさつき……」

「ううん。五十嵐君私のことあんまり好きじゃないみたいだから……」

どつやらわざわざ会話の相手をしてくれた礼をしているらしい。妙なところで律儀なお互い様だ。

そう感じ取ったモップの少年は、プイ、と顔を背けてさっさと掃除用具をしまっってしまう。

「別に好きなわけでもねえんだけど。まあ一応礼ならもらっとく」

ツンデレ乙、と言いたげな雰囲気を纏いながら、龍貴は学生かばんを抱えて保健室を後にした。

「……ツンデレ乙……って言えば良いのかな？」

ポツリ、と呟いて一拍、藤本は最終下校時間になる前に鍵と荷物を持って、龍貴の後に続くように保健室を出て行った。

午後7時半。藤本は多少の泥と血痕で制服をデコレーションしながら家路についている。その原因となった連中は路地裏で、気絶も出来ずに傷の痛みを訴えながらもがいている。

彼女は言うなればお人好しだ。しかし自分の意思は確固として持っている。だから許せないものは許せないし、許すものは自分の中に受け入れて許してしまう。許すものには女神ナイチンゲールの癒しを、許せないものには正義ナイチンゲールの鉄拳を。それが彼女、藤本 加奈の人格である。

「コレ・・・家族になんて説明しよう加奈かな・・・」

しょうも無い親父ギャグを言いながら、困った顔で血の匂いを放つ巨乳美女。傍から見れば、下手をすれば幽霊が何かと勘違いしてしまうその様は、夜の雰囲気にピッタリだった。

「まあ・・・悪漢を追っ払ったんだよ」って言えば・・・ああ、でも余計に心配かけちゃうかも・・・」

こうして、お人よし特有の悩みに頭を支配されながら、彼女は一日を終えていく。

第二話のオマケ（前書き）

あとがきのなアレです。はい。

第二話のオマケ

藤本「ちよつと・・・」

秀平「いやーなかなかヒロインっぽくなっただんじやないの？」

藤本「ねえ・・・」

龍貴「今回はハウリングの仕組みについてもちよつと触れてたしな」

藤本「あの・・・」

秀平「後日語るって言ってたけどなんとかなるのか？」

龍貴「さあ」

藤本「・・・ちよつとって言ってんでしょうが無視すんなやゴリラ
アアアアアアアア！！！」

龍貴「ごぶはあっ!?!」

秀平「おっ。さすが今回は力はいつてるね。まさかここでいずれや
るはずだった禁書パ口を入れ込むとは」

藤本「ふうーっ、ふうーっ・・・!」

龍貴「オエエ・・・モロ入った・・・」

秀平「・・・実際は相当疲れるようです。あのシーンは御 琴嬢

の羞恥パワーがミラクルを引き起こしていたらしいな」

龍貴「・・・お前・・・名前・・・言っちゃってるじゃん・・・」

秀平「・・・あ」

藤本「っていうか言わなきゃ良かった」

龍貴「さあて、来週の”北高の事情”は？」

秀平「あのほのぼの家族ライフアニメをパロって誤魔化すな。あとそんなに有名になってもいないのに略しても意味無いぞ？」

藤本「そもそも不定期更新だもんね」

秀平「まあ来週は俺か新キャラ視点って言う風に設定してるからな。また龍貴と藤本が登場か？」

藤本「そう！そういえば何でラストがあんなG指定的なふいんき（何故か変換できない）なの！？せつかく恋するしっかり者の乙女っていう全く新しい組み合わせの革命ヒロインを演じられると思ったのに！！」

龍貴「お前腹の中じゃそんなこと企んでたの？っていうか恋するしっかり者乙女ってもう何世紀前の話だよ。なに、お前の時間感覚昭和？明治？」

藤本「じゃーまんすーくれっぷす！！」

龍貴「そげぶっ！？」

秀平「夫婦漫才と禁書パロはその辺にしておきなさい」

龍貴「誰が、夫婦……だっ……！」ピクピク

秀平「っーか第二話なのに、登場人物第一話で出た奴限定って。次は多分新キャラ視点だな」

藤本「ちなみに本来この三人組に更に一人合流して、ようやくレギュラー勢ぞろいになります。つまり次回でレギュラー確定&王道パーティーが出来上がるわけだね」

龍貴「くう……内臓がひっくり返ってる気分だ……。まあ秀平視点で、秀平の知り合いという形で登場する可能性も無きにしも非ずだな」

秀平・藤本「その発想は無かった」

龍貴「なんでだよ」

藤本「えーそれでは、また次回にお会いしましょう！」

龍貴「勝手に終わらせんな」

秀平「第三話をお楽しみに！」

龍貴「いいぜ、そんなに主役差し置いて話を進めたいって思ってるなら、まずはそのふざけた幻想をぶち殺す……！」

秀平「いい加減にしろ」

第三話 熊本 秀平（前書き）

熊本 秀平

年齢：17

身長：173cm

体重：68kg

主人公、五十嵐 龍貴の親友。共に北欧市に伸びる魔の手を潰すために日夜奔走している共鳴者。お気楽だが芯は強く、友達思い。自分を犠牲にしようとする龍貴をいつも気遣っている。しかし本人の前ではそんなそぶりは一切見せないなど、気配りもできる方。年頃なりに彼女募集中だが報われない。

短くすっきり切った茶髪に、瞳は黒い。割りと整った顔立ちだが彼女募集オーラがそれを感じさせないところが悲しい。ガタイも良く、自らの家は剣術道場を営んでいる。最も、本人は継ぐ気は全く無いのでとつくの昔に出て行ったつきりなのだが。

第三話 熊本 秀平

熊本 秀平の親友、五十嵐 龍貴は実は生粋の甘党だ。どこまでなのかという食事には必ずデザート付き、間食も勿論甘味、新作のスイーツやお菓子などがあれば必ず手が伸びるほどだ。だから今こうして対面して、戦館町一番街にあるデパート内のスイーツバイキングに付き合わされてかれこれ一時間は経とうと言う状況でも決して驚かない。なぜならそれが自分の親友だからだ。

そんな秀平の意外な器のでかさをこれっぽっちも気にせず知らずのスイーツ男子は、小さく切り分けられたケーキを小山が出来るまで積み上げた皿を両手に、秀平の前の席に着く。

「ああ美味え。やっぱスイーツこそ至高だよな。もうスイーツが無い人生なんて考えられねえよ」

「何か話が意外と重くないか？つーかマジ糖尿病になっても知らねーぞ俺は」

「大丈夫。その分運動するから」

「それはカロリーの話だろうが！糖分の話をしてんだよ糖分の！」

思わず左拳でテーブルを叩いてしまふ。スイーツスイーツ連呼している親友がまさかここまでとは。思わず秀平は目頭を押さえた。

北欧市は今も安全とはいえない。こうしている間にも日本政府の手は北欧市民へと伸びているかもしれない。だから今こうしてのんびりしている場合ではないはずなのだ、本来なら。だが事実こうしてスイーツを堪能しているあたり、龍貴は危機感を感じているとは思えない。まあそんな男に付き合っている自分も自分なのだが。

一通り店内のスイーツを全種、それも二週三周したところでようやく龍貴は満足したようだ。このスイーツバイキングは時間料金制なのでそれほど財布にダメージは無いが、元を取るところか店内のストックまで食い尽くされてしまうような危機に、店員達はいつも脅かされている。そんな引きつった顔とおびえた視線に耐えながら、秀平たちは店を出て行った。

「はあ満足満足。コレでしばらく糖分には困らないわ」

「今まで糖分に困ったことなんてあるのか、むしろ」

そんな会話を二、三繰り返したところで、ザン！ と何か秀平達の前を立ち塞ぐ。

少女だった。手入れされた黒髪のポニーテールポニーテールに黒紫の瞳。龍貴より一回り小さい体型の女子高生だ。

秀平たちはこの少女を知っていた。名前どころか家柄までも。学校の保健アイドル、藤本 加奈と並ぶ有名人でもあるから、知り合いでなくとも知っているが。それでも秀平たちはこの少女を知らざるを得なかった。

「ようやくと見付けたわよこのウストラトンカチ！」

「誰がトンカチだ。俺の頭は釘打つために存在してんじゃねえんだぞ」

反応したのは龍貴だ。

秀平はため息をつきながらさりげなく半歩下がった。目の前の少女は龍貴が目的なのだから。

「ウストラトンカチはどこまで行ってもウストラトンカチなのよ！今日

こそ決着付けさせて貰うわよ！」

「決着なんて人類が生まれるはるか昔に着いたわ。そこどけ」

「・・・頼むから公衆の面前以外のところでやってくれ」

龍貴は耳を指でほじりながら、少女は目の前の少年に右人差し指を突きつけながら、秀平は両者を見てため息を更につきながらそれぞれ言った。

少女の名は田中たなか百合ゆり。田中財閥の一人娘にして次期後継者、兼北欧高等学校弓道部員で秀平達の同級生である。当然共鳴者ハウリンガルでもある。

そんな彼女が何故ここに居るのか。それは北高に入学したての頃、クラスの自己紹介も兼ねてハウリングの模擬戦（当然教員の監視付き）を行ったときのことだ。当時天才と呼ばれていた田中が圧倒的な力によって龍貴に敗北したのだ。それが悔しくて仕方ない彼女は、次の日から再戦の申し入れをそれはもう毎日のようにしている。今日もリベンジマッチを挑みに来たのだ。

龍貴はそんな彼女の反骨精神などお構いなしに、彼女の横を通り過ぎようとす。しかし田中はその肩をガツ！と掴むとグイッ！と自分の顔を引き寄せる。彼女は綺麗な顔立ちをしているので大抵の男子なら卒倒しそうだが、龍貴はそういう話題に無関心なので無反応だ。

「無視すんじゃないわよ！いいから戦いなさい！」

「なんなんですかぁ本当によぉ？人様の大切な休日潰すつもりか？テメエ何様だよ。田中様とか百合様とか私様とか言ったらぶっ殺すぞ」

「別に私はあんたの休日潰すつもりなんか無いわよ。ちょっと付き合ってもらっただけよ」

「それが休日潰してるってんだよ。いい加減にしとけよマジで。そんなんだから胸も体も器も小ちっせんだよ」

ブチッ

あつ、言っちゃったよコイツ。

何かが切れる音を聞き、刹那の速さで秀平は思った。きっと本人も気にしているであろうことをこの無節操で傍若無人男は微塵も気にせず言ったのだ。このまま穩便に事を運ぶという路線は完全に消え去った。

次の瞬間、龍貴の顔のすぐ横を一本の矢が掠めた。田中が弓を入れる袋から弓矢を出したのではない。その弓はもつと違う形状のものであった。

緑色に装飾された鉄に、黒い強靱な弦が引つ掛けられている。明らかに日本製・・・というか人間の手で作られたものではない。これが彼女のハウリング。

「ディーブライフル幾碧弓矢・・・このバカを蜂の巣にしなさい!!」

ディーブライフル幾碧弓矢と呼ばれた弦に指を引つ掛ける。すると田中の人差し指と親指の間から光が伸びたかと思うと一本の矢に姿を変える。弦を引き、現れた矢を放つ構えを取る。しかし龍貴はその瞬間、田中と秀平の前からドバツ！と高速で移動し、姿を消した。

「待ちなさい!!」

田中も後を追うように高速で移動する。秀平はやれやれといった

感じに肩をすくめた。そして二人を追うことにしたのか、自分も同じように高速で移動し、姿を消した。

女性の悲鳴。それは意外と響くようで響かないものだ。そもそも音が響いたりするのは、そういうった音響設備や条件があつてこそ。ましてや路地裏なんていう掃き溜めでは決して起こりえない。だから女性は走って逃げる。表通りに向かって助けを求めながら、後を追ってくる二人の不良の共鳴者から。

「ハアツ、ハアツ・・・！」

「ああもう面倒臭え。オラッ！」

女性の後方に居る不良の一人が、地面に掌を置く。すると女性が行く手を阻むようにコンクリートの壁が出現した。

「あ、あぁっ・・・」

女性は膝から崩れ落ちた。もう逃げられない。共鳴者ハウリンガルでも無い自分が敵う相手でもない。

「お前マジG」、これなら誰にも見られずにやれるじゃん？」

「結果オーライ？んじゃとつと・・・」

剥むくか、と言いかけたところで轟音が響く。三人の前方の壁が粉砕する音だ。絶望に染められた女性の顔は呆気に取られ、不良たちもポカーンとするしかなかった。

コンクリートが砕け散るなど、どんなパワーで誰がやったというのだ。そんな考えに行き着いたのは、土煙が晴れてコンクリートを破壊したモノの姿を視認したときだ。

不良の一人が言った。

「だ、誰だ!？」

「あぁ？」

気だるそうに人影が返す。ソレはゆっくりと不良たちのほうを振り向くと、また一段と気だるそうにため息をついた。

黒髪のストレートに赤い瞳。初見からすればまともな人格をしてはいないだろうという印象を与える。その少年は不良たちに向って

言った。

「なんだよ豚共、ブヒブヒうるせえぞ。家畜用の小屋が嫌になって抜け出したのか？」

「オイオイ、どうやら喧嘩ふっかけてるらしいなテメエ」

コンクリートの壁を突き立てたほうの不良が返した。不良は掌を地面に向け、灰色の波紋を発生させる。途端にコンクリートが波を打ち、巨大な蛇のような杭が少年に向っていく。

対する少年は、路地裏を形成している建物に向かってジャンプする。ジャンプといっても五、六〇センチほどだが、それでも杭を避けるのに充分だった。標的を見失った杭は地面に深々と突き刺さる。少年は杭の蛇の体を作り出したレールに、足を引つ掛けた建物の壁から飛び降りた。そのままレールを疾走し、真っ直ぐ不良たちの元へ向かう。

「クソ！」

「バカ慌てんな！次は俺だ！」

今度は隣にいる不良が懐から何かを取り出す。鎖だ。とは言っても腐敗しかけて攻撃には使えそうに無い。だが不良は共鳴者だ。鎖を掴んだ手から白い波紋が生まれ、腐った鎖は新品同然のように輝きを取り戻し、長さも数十メートルはある。鞭と化した鎖は少年を捕らえんと、波形に伸びる。

しかし少年は、そんな鎖の攻撃も見切ったようだった。気だるそうな表情は全く色を変えず、レールから跳んだと思えば今度は鎖の鞭すら足場にした。

「なに!？」

トントントン、と鎖を飛び移りながら、あっという間に不良たちの元へたどり着いた。だが不良たちはその先を見ることは叶わなかった。少年の拳がコンクリートの不良を打ち上げ、右足を軸にした左回し蹴りで鎖の不良の頭部を打ち抜く。

黒髪赤眼の少年、五十嵐いがらし 龍貴りゅうきは地面に倒れこんだ不良たちを見向きもせず、追われていた女性の方へ目を向ける。
女性は龍貴を見て、慌てて言った。

「あ、あの！ありがとうございます！是非お礼を・・・」

「うっせえ」

「させて・・・え？」

「うぜえんだよそういうの。別に褒められて褒美もらうためにやってるんじゃないんだ。ただ逃げてきた途中で邪魔になった障害を壊した、それだけ」

それだけ言うと龍貴は呆けている女性を置いてどこかへ消えてしまった。

その一瞬後、龍貴を追っていた田中がハウリングの弓、幾碧ディープライフル弓矢を持って現れた。

「ああもう！逃げ足は本当に速いんだから！」

一言。たった一言だけ。それだけ呟くと田中も龍貴と同じようにどこかへと消えていった。

消えた原理は分からない。消えた彼らが何者なのかも分からない。

さっきまで追われていて、それこそ命を懸けるような思いで逃げた女性も、それが些事のように思えてきた。訳が分からないまま、女性はブーツと立っていることしか出来なかったのだ。

「・・・と、ここまで来れば大丈夫か？」

そういつて降り立ったこの場所は、四つに区切られた戦館町せんかんちやうの三番街のとある空き地だ。どうもここにマンションでも建築するため
に広い空き地を作つたらしい。辺りを見回せば立ち入り禁止用の力
ラーコーンが、部外者の行く手を塞いでいる。

降り立ってから数十秒後、ダン！という音が乾いた空き地に響く。

とうとう龍貴に田中が追いついたようだ。

「ハア・・・ハア・・・やっと追い詰めたわよウストラトンカチ！^{ヴイ}振
反動脚があんたの専売特許だと思わないことね！」^{ント・ベイン}

ハウリングを行う際、必ず共鳴者は^{ハウリングガル}波紋を生み出す。その波紋は共鳴者とあるものが共鳴する時の振動運動が視覚化されたものなのだ。その振動で物体と反発し、その反動によって高速で移動する。それが振反脚^{ヴイント・ベイン}。しかし純粋に反発したまま移動すれば必ず意図せぬところまで飛ばされてしまうのは目に見えているし、普通の人間では反動でまず肉体が保たない。反発の規模、角度、地形、目的地の状況など綿密に計算し、かつその反動に耐えうる肉体を持つ共鳴者だからこそこの高速移動が可能となる。だからといって龍貴は決して頭が良い方ではないので、龍貴の様な人間の振反脚^{ヴイント・ベイン}は、いわば体に覚えさせた実践的移動法。実践的な共鳴者は時々目的地がズレても気にも留めないが、やはり精密さは落ちる。まあだからと言って、そういったことを常に、しかも瞬時に計算できるほどの演算性能はスーパーコンピューターくらいのも。ほぼ一〇〇パーセントの共鳴者が実践派だ。

田中の言葉に対し、龍貴は肩をすくめる。

「・・・本当しつこいなあ。まあでも安心しろ」

体の調子を確認めるように両の肩を回す。

「ここまで喰らい付かれたんだ。相手してやるよ」

「・・・フンツ！別にあんたの許可が無くても、あたしはそのつもりだったけどね！！」

生み出した光の矢を弦に引っ掛け、いつでも撃てるようにする。

龍貴たちが路地裏で不良をシバいていた頃、秀平は下宿していた菓子パン専門店に帰ってきていた。鍵はしまっている。主人は出かけているようだ。

菓子パン専門店は、日本のあらゆる場所から、惣菜パンや菓子パンなどのアイデア溢れるパンを並べている店だ。食事代わりに手軽に食べられるし、何より腹も膨れる。なかなか人気のある一店だ。実家を飛び出した秀平は労働を対価に、主人に住居兼店の一室を与えられている。

鍵を開け、自室に入ると真っ先に目に飛び込んでくるのが、窓際

の刀の置き台に収まっている一本の日本刀。

「・・・また頼むぜ、相棒」

日本刀を拾い上げると、今頃お祭りのように暴れ狂っているであろうあの二人を止めなければと、窓から空を見上げた。

第三話 熊本 秀平（後書き）

戦闘描写がイマイチ。っていうか龍貴最強ですね（汗

まあいまの所負けるようなシチュは考えてないので仕方ないんですが（笑

次回は龍貴VS田中です

第三話のオマケ

秀平「ようやっとレギュラーメンバーが揃ったな」

藤本「今回私は出なかったけどね」

田中「って言うか五十嵐強過ぎない？」

龍貴「うるせえ。そこは主人公補正つて奴だ。どんな漫画やアニメでも主人公は最初の敵に対しては絶対無敵。まあ途中で負ける事はあっても、作品の全体を通して大体勝率は六、七割くらいで安定してるんだよ」

藤本「身も蓋も無いね」

田中「最初の敵って……どれ？」

龍貴「多分今回の不良二人組」

秀平「最初はただのスパイ（ほぼストーカーだったけど）だったからな」

田中「ああ……五十嵐がキュツと絞め殺しちゃった奴ね」

龍貴「アレは我ながら秒殺だったな」

秀平「握力と腕力だけでヤっちまったからなあ……ぶっちゃけお前本当に人間なのかって思ったわ」

藤本「でも共鳴者は普通ハウリングガルの人間じゃないって描写があつたから問題ないんじゃない加奈？」

龍貴「そのつまらねえおやじギャグを止めろ」

藤本「ちなみにこれ、私のアイデンティティ的な何かにする予定みたい」

龍貴「自分の名前語尾とかトチ狂つてるとしか思えねえな！」

藤本「フンッンン　　！！！」

龍貴「あばばばばばば！！？藤本さん！？その骨そっちに曲がないから！！骨にもベストポジションってのがアツ

！！！」ボキボキボキボキ

田中「……………加奈ちゃんがヒロインらしからぬ雄叫び上げてんだけど」

秀平「自分のアイデンティティ否定されたんだ。当然だろ」

田中「他人の骨あらぬ位置に移動させてでも守らなきゃいけないアイデンティティなのソレ？」

龍貴「ピクピク

秀平「イヤー、怪力ヒロインも最近が増えたもんだよなー」

田中「そうねー、むしろそれはそれで魅力的だもんねー」

藤本「うん、これで共鳴者は普通の人間じゃないってことが証明されたね」

秀平「まあそこらへんは後々説明されるだろ」

田中「次回は私と五十嵐のバトルになるわけだけど・・・やっぱり私負けるのよね？」

藤本「いやいや、最後にどんでん返しがあるかもしれないよ？」

田中「そうじゃなかったら、悪の組織の一味とか現れて中断して、「お前との決着着いてないから死ぬな」的な展開とか？」

秀平・藤本「あー」

龍貴「死ぬかと思った・・・。悪の組織つつつても日本政府だろ？」

藤本「ストーリー的には、私たちの珍しい力を狙う国の政府の陰謀と戦うイメージだからね」

秀平「実際俺らは本編中でもその刺客と戦ってるわけだが」

田中「厨二な展開ね。先が知れるわ」

秀平「底じゃなくてか」

藤本「私はヒロインだし、やっぱり攫われて人質とかあるの加奈？」

龍貴「（その口調二度とツッコまねえ）そしたらやっぱり主人公である俺は助けに入らなきゃならないわけで」

田中「そして親友役である熊本と喧嘩になって」

秀平「（あ、やっと名前呼ばれた）二人揃って悪党退治して」

藤本「めでたく主人公とヒロインは結ばれる……………、
？」

龍貴「……………」

藤本「……………」

秀平「……………」

田中「……………」

全員「ねーよ、うん」

第三話のオマケ（後書き）

まあ王道だとそこら辺ですよ。作者は頭が悪いのであまり捻ったのはかけません、ご了承ください。

第四話 田中百合（前書き）

田中 百合

年齢：16

身長：165cm

体重：バカ！グズ！変態！蜂の巣にするわよ！

ヒロイン、藤本 加奈の親友。龍貴や熊本 秀平ともつながりがある。過去龍貴にハウリングの勝負で負けて以来彼に挑戦状をいつも叩きつけている。本人は鬱陶しがって誤魔化すか逃げるかしているが。そんな彼女から分かるように反骨精神旺盛で流行には誰よりも敏い。ちなみに田中財閥の一人娘。

つややかなポニーテールの黒髪に、瞳は黒みがかつた紫。スタイルは良いのだがいかんせん胸g（この作者は蜂の巣にされました）

第四話 田中百合

幾碧弓矢には「弦を引くと任意の本数だけ矢が現れる」という能力がある。だがそれは弓本体の特性。矢には自動追尾性能がある。だから幾碧弓矢の射撃から逃げられたものは今まで居なかった。そう、目の前の傍若無人男が現れるまでは。

数十本の矢が追ってくるにも拘らず、その男は平然と走っていた。空き地はマンションを作るといっただけあってそれなりに広く、田中からかなり離れた距離でその男は矢から逃げ続けていた。やがて面倒くさくなつたのか、男は腰の左側に右手を添える。

「…？」

田中にはその行動の意味はわからなかった。何かのまじないなのだろうか。否、自分の知る限りこの男はそんなゲン担ぎをするような人間ではない。

男は後ろを振り向き、添えた手の親指で腰から何かを下に弾いた。するとベルトに付いていた小型ポケットから、小さい何か飛び出す。飛び出した”それ”を上から空いた左手で掴む。数十本の矢と真正面から対峙している男は、左手に持っていたものを前に突き出す。

「さて…いくか」

今度は左手の親指で何かを弾く。

弾かれたそれは中身を出したかと思うと、極小の火を灯した。

田中はようやくそれが”ライター”だと認識できた。

男の左手から赤い波紋が広がる。

ゴッ！！！！

爆音が周囲に鳴り響く。

「ゲホツ、ゲホツ！……………嘘…でしょ…？」

土煙がこちらまで飛んでくるとはどれだけの衝撃波だったのか。男と田中の距離は短く見積もっても一キロメートルはあったはずだ。やがて土煙が晴れたかと思うと、さっきまで空中を飛来し、男を追っていた田中の矢は全て消滅していた。

代わりに男に変化があった。

肩から腰にかけてフラフープのようなものが男に引っかかっていた。よく見るとフラフープは何だかユラユラと揺らいている。さらにフラフープはもう一つあり、二つのフラフープは交差上に男に絡み付いていた。

田中はフラフープは炎で出来ているものと理解した時、少し嬉しく感じた。冷や汗をかきながらもこうして笑えるのは、目の前の男、五十嵐いごらん龍貴りゅうきが本気で戦ってくれたからなのか。

「……………初めて見るわ……………それがアンタのハウリングなのね」

「正確には違うけどな。これはいわば未完成、完成版は正直使いたくねえ」

（私の幾碧弓矢の矢を消し飛ばす威力でも、まだ未完成なの…！？）

これでもまだ、全力ではない。

これでもまだ、男は力を出し切っていない。

田中はそれを腹立たしく思ったが、同時に喜びも増していた。そうでなくては面白くない。最初にハウリングも出さずに自分を負か

した男が、その程度で全力とのたまって貰っては困る。

弦に指を引つ掛ける。それを合図に、田中の周囲に再び数十本の矢が現れる。

「なら、全力を引つ張り出させてあげるわ！」

放たれた数十本の矢は龍貴に向かって一斉に飛んでいく。

一方龍貴は気だるそうに右手を薙ぐ。

「勘弁しろよ」

炎のフラフープから赤い波紋が現れた。波紋が消えて一秒経ったか否かで、龍貴の眼前から凄まじい大きさの炎が放たれ、田中の矢を迎撃した。

まるで超巨大なガスバーナーが蜂の大群を焼き払うかのような光景だった。

「全力出したらテメエを消し炭にしかねないからさ」

脅してではない。この男はその気になれば本当に自分を消し炭に出来る。

だが恐怖はなかった。

次の瞬間には振反動脚で龍貴の背後に回り、再び弓矢を放つ。今度は一本だ。その一本は確実に龍貴の頭蓋を狙い飛んでいく。

「遅えんだよ」

そういつたが速いか、頭蓋を狙われて尚平然とした顔で男は振り向き様に何かを真横に薙いで矢を打ち落とした。腕ではない。もつと長いものだ。その長いものは形状こそ不安定だが、長さは龍貴の

身長ほどもあり、先端には石突と刃がそれぞれ付属していた。そう、炎で作り出した槍だ。

龍貴は槍を左手で軽く弄びながら田中を見る。炎で出来ているから重量は存在しないのだろうか。

「炎の槍^{シユヒーアランメ}。炎はただ酸素を燃やして発生する現象に過ぎないから形とかは無い。けど、俺のような炎の共鳴者^{ハウリンガル}はその形状や流れを操作できる。だから炎を圧縮して粘土みたいに武器を形作ることも出来る」

例えば某未来世界の猫型ロボットが使った空気砲のように。圧縮すればそういった流動体も質量を得ることが出来、固体を傷つけることも出来る。龍貴はそれを炎を使ってやって見せたのだ。

おそらく龍貴を困^{ハウリンガル}う二つのフラフープは”素材”だ。共鳴者は自らが生み出した物質、現象とも共鳴できるため、実質無限にエネルギーを生み出すことが出来る。龍貴はフラフープの炎と共鳴し、先ほどの大型の炎や炎の槍を生み出した。一々ライターを使って炎を出現させる手間を省くために。

「…随分チマチマした戦術ね」

「戦うことにおいて何が重要なのか分かるか？答は一つ、”はやさ”だよ」

炎を纏った少年が視界から消える。

周囲に気を張る。右だ。

炎から生まれた質量を持った刃が、田中のほほを掠める。ギリギリで避けた田中は再び振反動脚で龍貴から距離をとった。弦に指を引っ掛け、龍貴の動きを見る。

「チマチマしてようがコソコソしてようが、”手間を省く”ってのは本当に重要なことなんだぜ。共鳴者は確かに何かと共鳴おれたちして力を発揮する連中だ。でもな、」

炎の槍を持った手から赤い波紋が生まれる。

その光景を見て数秒後、田中は目を見開いた。そして同時に思った。

有り得ない、と。

「共鳴する環境を作る過程の最中を突かれたら一巻の終わりだ」

大量の火の玉が、靈魂を司る人魂のように龍貴の周囲に現れる。

それらはググツ、と細長く伸びていく。やがて火の玉は、さつき田中がやった”任意の本数分の矢を生み出す”ように、標的に向かって伸びる槍となった。およそ50本くらいだろうか。

龍貴は戦り始めと全く変わらない顔で田中を見据える。

「常に手元において置くようにしてるのはお前だつて一緒だろ？派手な武器とか大技とか、そういうのは必要ないんだよ、実際な」

槍を持った腕を持ち上げ、標的を指す。

50本余りの炎の槍は標的に向かってダーツの如く真っ直ぐ飛んでいく。

「クッ！！」

田中はすぐさま矢を大量に”炎の槍に向かって”飛ばす。

だがあたらな。龍貴が作った異様な光景に心を奪われ、冷静さを失っているのだろう。

何本か落とすことは出来たが、やはり打ち落とすきれない。田中は振反動脚でその場を離れる。しかし、すぐに自由は奪われた。

ピタリ

着地した地点で、何かが自分の首のすぐ横に置かれた。

熱い。

おそらく相当な熱を持っている。

田中は後悔した。相手の攻撃に意識を奪われたことを。

「…俺の勝ちね」

清本きよもと 敦あつし。それが彼の名前だ。

彼は生まれも育ちも東京の生粋のシティー人間。

彼は生まれたときから優秀だった。小中高と抜群の成績で卒業し、大学でも首席を獲得、生物学の研究者として日夜実験を繰り返していた。

そんな順風満帆の彼の人生を一新させたのは、政府の使いと名乗った人間がやってきてからだ。その人は実に淡々と、まるで原稿用紙に書いた字をそのまま読むかのごとく、彼に必要な事項を喋り終えるとそのまま消えていった。

言わば、「上からの指令」。先輩とも上司とも格が違うものからの命らしい。その内容は…。

「これが…ハウリンガル共鳴者の戦いか…」

にわかには信じられなかった。何しろそんな種類の人間など聞いたことが無い。世界に公表もしていないという。実際に目の当たりするとその力は凄まじい。先ほどの巨大バーナー然り、矢の弾幕然り。もはや自分達と同じ人間の領域をはるかに超えている。

清元はありのままを書いた。自分がハウリンガル共鳴者を見て起きた事をその

まま記す。報告書に纏めるのはとつてあるホテルでやれば良い。しかし次の瞬間、得体の知れぬ悪寒が彼の全身を包む。

「随分コソコソしてるな？まあ新入りの調査員みたいなモンなんだろうが…。それにしてもあいつらが派手に暴れてくれなくて良かったぜ。”事後処理”も楽になる」

彼は生まれも育ちも東京の生粋のシティー人間。

彼は生まれたときから優秀だった。

「あつ、ああ…ああああああつあああ…」

しかしそれは、表の世界での人間性に過ぎない。

命のやり取りにおいては赤子同然の彼は、体を無意識に震わせることしか出来なかった。

翌日の北欧高等学校。二年A組。

「それでき、あたしの喉元に槍突き立てて「俺の勝ちね」って！もう信じらんない！何処まで気障気取るつもりなわけ！？いつか必ずぶっ殺す！！」

お嬢様、それも女の子とは思えない言葉遣いで、田中 百合は親友に愚痴をこぼしていた。昨日の敗北でますます反骨心が旺盛になっただけ。机に両手を叩きつけ、ものすごい剣幕で親友の顔に迫っている。そんな親友、ふじもと藤本 かな加奈は親友の反骨心をこれ以上増長させないで欲しいと、あの傍若無人男にかなわぬ願いを託していた。

「そうだね、ムカつくね。だから席着こう？もうすぐチャイム鳴るよっ。」

とりあえず適当にあしらい田中が席に着くことを確認すると、自分も机の中から教材を取り出す。ふと外を見ると、ブツ切れの雲が列を作って空を漂っていた。

今日も北欧市は快晴だ。

第四話のオマケ

田中「アンタ本当ムカツク」

龍貴「開始早々なんなんですか？喧嘩売ってんですか？」

秀平「やめろっつの」

藤本「今回は割かし適当に書いたみたいだね。戦闘シーン意外グダグダだったし」

龍貴「作者が今話題の2D対戦型格闘ゲームにはまってるからな」

秀平「ああ、それでこんな更新遅れたのか」

龍貴「いや、作者自身就職活動とかあるから正直書く時間とかも無い」

田中「まあでも、その代わりダイジェスト的なものを作ってどんな風に話を展開させるかってのを決めるらしいわ」

秀平「ようやく自分の書き方ってのを見出したんだな、良かった良かった」

田中「いや、文章書くの面倒になったらしくて」

秀平「……………」

藤本「まあそれはさておいて、第四羽はバトル全開だったね」

田中「共鳴者同士のガチバトルって今回が初めてじゃない？」

秀平「当の本人はぜんぜん本気じゃなかったけどな」

田中「幾碧弓矢!!」

秀平「うおおおお!!」

龍貴「俺の本気は相当の場面じゃないと見れないぞ。ガチな話」

藤本「炎のフラフープ二本が体にクロスする形で引っかかっているだけ？」

秀平「もうその時点で普通じゃないよな」

田中「ていうか能力がハッキリしてんのってあたしと加奈ちゃんだけでしょ、未だに」

龍貴「まあその辺の詳しい話も今度やるってことで」

秀平「結局グダグダなままで終わるのか…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1137w/>

ハウリング

2011年11月11日19時38分発行